

時事評論  
現代を  
読む  
6

森本あんり

# 中央集権と地方分権

## 神学教育の連携

もりもと・あんり  
1956年生まれ。  
国際基督教大学  
東京神学大学、プ  
リンストン神学大  
学(DPU)卒業。  
国際基督教大学教  
授。



歩いてゆけるくらいの距離にあり、学生も教員も自由に往来している。

こうした連合組織をもつことのメリットは明らかであろう。なかには専任教員が数名で学生総数が数十名、という小規模校もあるが、

G T Uのおかげで幅広い教育内容を確保し、各神学校の蔵書を集約した大きな図書館を利用することが

できる。それぞれが規模に応じて経常費を分担すれば、共有でき

るところは授業も教員も事務も自前で揃える必要がないわけである。

わたしはここで「アジア神学」

の授業を担当したが、その授業にはカトリックからユニテリアンまで14人の学生が登録しており、はじめはその多様性に面食らってしまった。何せ三位一体論や義認論という神学の基本線においてす

ら理解を異にする学生たちである。だが、いざ学期が始まってしまふと、そんな気遣いはまったく無用であった。わたしも学生たちも、

お互いの違いから学ぶことの方がはるかに多く、それがかえって自己理解を反省的に深めるよい機会となったからである。

### 日本の神学校も協力を

振り返って、日本の神学教育は

どうだろうか。総合大学の神学部を別にすれば、日本の教派神学校はどこも小規模で、学生と予算の確保にいつも汲々としている。そ

れぞれが小さくて困っているのなら、お互いに協力してもっと一緒

にやれることはないだろうか。何もすべてを一致させて合同する必

要はない。独自の課程をもちつつ、協力できるところで協力し省力すれば、むしろ独自性の強化と集中につながるだろう。

アメリカは、もともと13の独立邦が連合してできた国である。現在でも州と連邦との関係は複雑だが、個性を尊重しつつゆるやかな共同体を作る、という作業には慣

れているのかもしれない。それに対し日本では、完全な一致団結か、よそよそしい分離かのどちらかに傾くため、その中間は不安定で居心地の悪いところになってしまう。日本基督教団はその典型である。

政治や行政の世界でも、日本は

まだまだ中央集権国家で、地方分権はかけ声倒れのままである。実は、G T Uの学部長も時々こぼしていたが、管理する側にとっては一元化されたヒエラルキーの方が都合がよい。だが、狭い日本のそ

のまた狭いキリスト教界である。そろそろ神学校がこういう連携を示してもよいのではないか。神学

校が元気でないと、教会も元気にならない。本誌読者の中にも、G T Uの卒業生が何人かおられるはずである。日本の神学教育にも独自性を尊重しつつゆるやかに連

合する共同組織がほしい、というわたしの考えに（ゆるやかに）共感していただけるだろうか。

### 連合組織のメリット

研究休暇で春学期をカリフォルニア州バークレーに過ごした。ここには「連合神学大学院」(G T U)という、9つの神学校が連携して運営される大学組織がある。この組織に属しているのは、バプテスト、聖公会、ドミニコ会、フランススコ会、イエズス会、ルター派、長老派、ユニテリアン・ユニヴァーサルリストの8校と、会衆派、メソジスト、ディサイプル派などを母体とする超教派で最大規模の太平洋神学校である。

G T Uとして発足したのは1962年。各神学校は個別の学長と教授会と行政組織をもち、自派の神学教育と教職養成を行っているが、その上にG T Uの学長と教授会と行政組織があり、博士課程はG T Uが担当する。橋を渡った対岸にあるサンフランシスコ神学校を別にすれば、ほとんどの学校は